連載ミニエッセイ ２３

槍と剣 ── 北アルプスの夏

２４期　徳田完二

本格的な登山と言える山登りを二度経験した。いずれも大学院生の時で、登山歴のある先輩に手ほどきを受けながら夏の北アルプスに行ったのである。と言うより、「連れて行ってもらった」と言った方が適切かもしれない。

初めの年は、まずその先輩とスポーツ用品店に行き、登山靴、登山用靴下、帽子、ピッケル、リュック、ポンチョ、水筒などの登山用品を一からそろえた。リュックに物を詰める時は、軽いものを下に入れ、重い物を上に入れると、リュックが背中に密着して背負いやすい、という登山の基本もこの時初めて知った。

登山初体験は槍ヶ岳をゴールに定めた行程だった。五人連れで、まず燕岳（つばくろだけ）という山に登り、そこの山小屋で一泊した後、次の日は一日かけて長い尾根を辿って槍ヶ岳を目指し、そこで一泊してから下山する、そういうコースだったように思う。

もうずいぶん昔のことゆえ細かなことは忘れているが、印象的な場面のいくつかは今も記憶に残っている。まずは、なんと言っても尾根伝いに延々と歩く「縦走」である。右も左も急斜面の細い道を辿り、下界（山岳地帯ではない平地）を眼下に眺めながら進むうち、やがて下界が見えなくなり、周囲はすべて北アルプスの山、山、山……という光景が広がった。日常の場所からは隔絶した別世界。これぞ登山、という気分だった。はるか彼方に槍ヶ岳の尖った山頂が小さく見えた時は、あんなところまで行くのかと、ちょっと気が遠くなるような感じがした。槍ヶ岳は数ある山の中でも独特である。その名の通り山頂が槍の穂先のように尖っているので、すぐそれとわかる。

尾根伝いに歩くと言ってもかなりのアップダウンがあった。特に急なところには登り下りがしやすいように鎖が取り付けてあり（これは「鎖場」と呼ばれる）、それにつかまりながら進んだ。だから、全体としてはそれほど楽な行程ではない。それだけに、休憩の時、巨大な岩の上などに腰を下ろして啜るコーヒーの味は格別だった。

夕方が近づいたころ、ようやく槍ヶ岳に着いた。槍のように鋭く切り立った山頂部が目の前にそびえていた。そこにたどり着く少し手前には、おびただしい数の大石小石が積み上がって斜面を形作る「ガレ場」と呼ばれるところがあり、時々、足で踏んだ石がズズズ…と斜面を少しずり下がるのだった。一瞬、このまま谷底までずるずると落ちていくのではないかと不安にかられた。

槍の突端には大勢の人がいた。最頂部はごろごろした岩でできており、面積はけっこう狭かった。せいぜい十畳くらいだったような気がする。穂先の付け根からそこまでの高さはビルで

言えば三階くらいだっただろうか。登山客は小さなビルの屋上の縁に腰掛けて下に足を垂らすような恰好で座るのだが、高所恐怖症の気がある私はこわごわ周囲を見回した。登ってきた方角から見て裏側にあたるところは深い絶壁だった。すぐ脇には「アルプス一万尺　小槍の上でアルペン踊りを…」の歌にある小槍があった。それは細い岩の柱がそびえたったような形状で、そのてっぺんにはとても「アルペン踊り」を踊れるようなスペースなどなかった。

その後の記憶はあまりない。覚えているのは、その夜、山小屋の薄暗く狭い寝床で寝たこと、次の日、名残り惜しさを覚えながら下山したこと、延々と降りていく道で片膝を痛め、ちょっと歩きづらかったことくらいである（ちなみに、登りより下りの方が膝を痛めやすい）。ともあれ、初めての登山は達成感が満タンになった。

次の年は三人で剣岳を目指した。このときはアイゼン（登山靴に装着する爪状の登山用具）を買った。雪渓を登ることになっていたからである。

まず、ライチョウで有名な立山に登り、そこから剣岳を目指したように思う。二度目の登山は初めての時に比べ記憶に残っている場面がなぜか少ない。よく覚えているのは、霧で周囲の景色がかすみがちな雪渓を、アイゼンをザクザクと突き立てながら登り続けたこと、頂上はものすごい濃霧のため何も見えなかったこと、また、山小屋で作ってもらった弁当を寒さに震えながら食べたこと、そして、山を下る時には、ピッケルでからだを支えながら雪の斜面を登山靴で滑り降りて遊んだことである。冬に雪の積もる田舎で育った私は、子どものころ竹のスキーでよく遊んだのだが、剣岳ではその時の経験が大いに生きた。昔取った杵柄とはこのことだと思った。

私に登山を体験させてくださった先輩はとうに鬼籍に入られた。彼がいなければ、私は登山とは縁のない人生を送っていたはずである。感謝、感謝、感謝。そう言うほかはない。

連載ミニエッセイ ２２

引っ越し人生

「さよならだけが人生だ」という言葉がある。これは、ある漢詩（干武陵『勧酒』）の一節にある「人生即離別」を作家の井伏鱒二がそのように訳したものだと、学生時代に何かで読んだ覚えがある。

ところで、「人生即引越 ── 引っ越しだけが人生だ」と言えばいささか大げさに過ぎるだろうが、引っ越しは多くの人が経験していると思う。かく言う私は、七十年ほどの人生において十五回も引っ越しをした。

まず、北高入学に際して、郷里の隠岐から松江に引っ越した（１）。その時は寮に入った

が、一年後に下宿に移った（２）。その後、大学進学に伴い大阪へ行くことになった（３）。ところが、思うところがあって大学を受け直すことにしたため、次の年、松江に舞い戻った（４）。北高の補習科に入ったのである。

さいわい再受験で合格したので京都に移り、あるお宅に下宿した（５）。しかし、そこは大学に通うには少々遠かったので、二ヶ月ばかりで下宿を替えた（６）。そうこうするうちに、間借りの生活に飽きてきて、安い木造アパートに引っ越した（７）。そこでは、学生時代の大部分といっていいほどの年数を過ごした。学部、大学院を通しての十年弱である。

大学を出た後は広島で職についた（８）。住んだのは、太田川という大きな川のほとりにある耳鼻咽喉科の三階だった。それから五年ほどして札幌に移住することになり、国家公務員宿舎に住んだ（９）。この宿舎はさまざまな職種の国家公務員のためのもので、五階建ての棟が三十幾つも並ぶ巨大団地だったが、給与水準（〇級〇号と言われるもの）によって、また単身者かそうでないかによって、借りられる部屋の広さに違いがあった。それで、少しでも広く、少しでも新しい部屋に移りたいとの思いから、短い間に二回も部屋を替わった（１０、１１）。そこは転勤族が多かったので、年度の変わり目に部屋を移るのは難しくなかったのである。ちなみに、三年くらいで異動になる転勤族の人たちは、いつ異動の辞令をもらってもいいように、衣類などは引っ越しの時の箱に入れたままにしておくのだそうである。そしてその子どもたちは、遠からず転校するのだから、クラスメートとは仲良くしつつもあっさりした関係にとどめるようにしているのだとも聞いた。だから、そういう子どもたちの友人関係はクールらしかった。そんな団地に三年ほど住んだ後、私はマイホームを手に入れて引っ越した（１２）。三十代半ばのことである。

それから十六年ほどを経て、今度は京都に移住することになった。初めは単身赴任だったのでワンルームのマンションを借りたが（１３）、家族と一緒に住むために一戸建ての借家に移った（１４）。そして、その後まもなく中古住宅を手に入れた（１５）。それが今の住処である。

このように住む場所をあちこち変えている間に、本籍地を何度か移した。戸籍謄本がほしい時などに、札幌から、生まれ故郷の隠岐の役場に連絡し、郵送してもらうのが面倒だったからである。同じ理由で京都に戻った時も本籍地を変えた。現住所は実際に住んでいるところを役所に届けなければならないが、本籍地はどこでもかまわない。ちなみに、札幌時代の知人は、結婚した時、本籍地を札幌テレビ塔がある場所にしたとのことで、当時はそれが流行っていたらしい（なお、東京では皇居の住所を本籍地として届ける人が少なくないとも聞く）。そうなると、そもそも本籍地とは何なのかが分からなくなるのだが、それはさておき、私の今の本籍地は金閣寺のすぐ近くである。

何度も引っ越ししたせいか、それぞれの引っ越しの時に何があったかはおおかた忘れてしまったが、わりあい記憶に残っているのは、広島から札幌に移った時のことである。妻の実家が下関にあった関係で、その時は北九州の門司港からフェリーに乗った。船が関門大橋の下をく

ぐる時、デッキからはるか頭上の橋を見上げながら、これからいよいよ北の国に向かうのだとしみじみ思った。その後、神戸でフェリーを降り、車で舞鶴まで行って再びフェリーに乗ったのだが、船中二泊の旅程を経て小樽港に着岸した時のことも印象に残っている。まだ夜明け前で、辺りは真っ暗だった。小樽の街の明かりがぽつりぽつりと寂しげに光っているのを見て、とうとう北海道に来たのだと、感慨深かった。

その後、十六年ほど住む間、実にいろいろなことがあった札幌を離れ、京都に移動した時のことは、数ある引っ越しの中でも現在に近いためもあってけっこう覚えている。小樽からフェリーで敦賀に行き、そこから車で京都に向かう行程だったのだが、札幌の家を発つ日、すっかり暗くなった庭先で、ずっと親しくしてもらっていた近所の奥さんが妻と話しているうち涙ぐんで声を詰まらせたこと、愛犬を連れての旅だったので、フェリーに備えつけの小さなケージにその子を入れようとした時、私と離れるのを嫌がったその子がひどく暴れて手こずったこと、フェリーから降りた後の車の中でその子が夜通し立ったり座ったりしてひどく落ち着かなかったことなどが、印象深く心に刻まれている。その子は、生まれてすぐ近所の人からもらった豆柴系雑種のオスで、茶、白、黒の色合いがユニークな十歳だったのだが、何の因果か、京都に着いたその日の午後に、ある事故のために死んでしまった。痛恨の極みだった。

「人生即引っ越し」はともかく、「人生即離別」、さよならだけが人生だという言葉にはリアリティが感じられる。私はもう今の家を離れるつもりはない。今度引っ越しをするとしたら、転居先は（たぶん）天国だろう。